

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1)夏秋野菜(果 菜類)の後期 管理</p> <p>(2)いちごの開 花期までの 管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 夏秋野菜（果菜類）の後期管理 ○ いちごの開花期までの管理 ○ レタスの育苗・初期管理 ○ そらまめの育苗 ○ 冬春野菜の土づくり <p>ア かん水・追肥</p> <p>必要なかん水量は夏季に比べると少なくなる。しかし、晴天が続く場合は草勢を見ながら適宜かん水し、特に、雨よけ栽培では土壌の乾燥による生育遅延を防ぐため定期的にかん水を行う。</p> <p>気温の低下とともに肥効も低下するため、液肥や速効性肥料等で肥切れさせないようにする。</p> <p>イ 整枝および摘葉</p> <p>気温が低下すると生育が緩慢となるので、強い整枝や摘葉は行わず、できるだけ茎葉の確保に努める。</p> <p>ウ 病害虫防除</p> <p>草勢の低下に伴い、葉かび病、すすかび病などの病害が多発する恐れがあるので、ほ場をよく観察し、初期防除に努める。 (写真1)</p> <p>ア マルチ被覆</p> <p>頂花房を傷めないために、出蕾期までにマルチを被覆する。被覆後も温度が高いようであれば、マルチの裾を畝の肩まで上げて、地温上昇を防ぐ。</p> <p>イ ビニル被覆と温度管理</p> <p>第1次腋花房の花芽分化後、平均気温が16～17℃を下回る頃が被覆の目安となる。品種や作型、天候等により時期が異なるが、おおむね夜冷・株冷で10月中旬、普通促成で10月下旬頃である。被覆直後は、ハウス内温度が上昇しすぎないように換気</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p style="text-align: center;">写真1 トマトの病害 左：トマト葉かび病（葉裏）、右：トマト疫病</p>

項 目	作 業 内 容
(3)レタスの育苗・初期管理	<p>に留意する。</p> <p>ウ 本ぼでの炭疽病拡大防止 炭疽病は育苗床から罹病株を持ち込むことによって拡大する(写真2)。</p> <p>このため、本ぼで発見した発病株はすみやかに除去し、健全株を補植する。併せて、薬剤散布を行うなど、新たな感染の防止に努める。</p> <p>エ 病害虫防除 定植後から出蕾期までは、病害虫の発生の多い時期である。天敵やミツバチへの影響などを考慮のうえ防除を徹底する。ヨトウムシ類、タバコガ類などについて発生初期の防除を心がける。</p> <p>ア 播種および定植 レタスの発芽適温および生育適温は 15～20℃である。9月下旬～10月上旬に播種すると約4か月で収穫期に達するが、この間の平均気温が1℃高いと収穫期は約1週間早まるとされる。</p> <p>レタスは好光性種子のため、種子が隠れる程度に薄く覆土する。200穴のセルトレイに播種し、発芽後は徒長を防止するため日の当たる場所で育苗する。なお、かん水は丁寧に行う。</p> <p>定植には、本葉3～4枚の若苗を用いる。徒長苗や老化苗では活着が悪く、外葉の生育が劣って結球不良となりやすいのであるべく回避する。</p> <p>イ 追肥の施用 生育初期に肥効が低いと、外葉が充実せず結球が劣る。そのため初期生育が不良であれば、本葉10枚頃と結球始期に、液肥や速効性肥料を追肥する。</p>



写真2 いちご炭疽病で萎れが発生した株(本ぼ)

項 目	作 業 内 容
(4) そらまめの 育苗	<p>ア 播種時期 そらまめの発芽適温は 20℃前後、生育適温は 15～20℃である。幼苗期（本葉 5～6 枚頃まで）は耐寒性が強いが、生育が進むと寒害を受けやすくなるため、極端な早播きを避け、平坦地では播種の目安を 10 月中旬頃とする。</p> <p>イ 育苗 苗立枯病予防のため、種子消毒を行う。播種は、おはぐろを下にして種子の 4 分の 3 程度を培土に押し込み、十分かん水した後、新聞紙で覆ってさらにその上からかん水し、乾燥させないようにする。約 1 週間後、発芽が揃ってきたら新聞紙を除去する。以後は、土の表面が乾いたらかん水を行う。また、薄手の寒冷紗等で覆い、モザイク病を媒介するアブラムシ類の飛来を防ぐ。</p> <p>ウ 本ぼの準備 連作すると、忌地現象やえそモザイク病、立枯病等が多発するので、4 年以上そらまめを作付けしていないほ場を選定する。作付けほ場にはあらかじめ完熟堆肥や苦土石灰を施し、よく耕うんしておく。基肥には 10 a 当たりの成分量でチッ素 8 kg、リン酸 12 kg、カリ 10 kg となるようにし、畝幅 120～140 cm、株間 50 cm 程度（1 条）で定植できるよう畝立てする。モザイク病の予防のため、アブラムシ類を忌避できるシルバーストライプマルチを使用すると良い。 本葉が 3 枚程度展開した頃が定植の適期であり、植え遅れないよう余裕を持って本ぼを準備する。</p>
(5) 冬春野菜の 土づくり	<p>冬春野菜の播種または定植の 2 週間前までに、牛糞堆肥を 2～3 t/10 a、苦土石灰を 80～130 kg/10 a 施用し、十分に混和する。また、降雨により畝立て作業が遅れないよう排水溝を設置しておく。</p>



写真3 播種したそらまめ